

# 被災屯所すべてがようやくやくやく再建し、新たなスタートをきった

## 岩手県陸前高田市消防団

**陸前高田市消防団**  
条例定数865名  
団員以下586名在籍(令和2年5月1日現在)  
市内に8分団を擁し、市民の安心安全を守っている。令和2年秋に消防団結成65周年を迎える。



岩手県陸前高田市では今年3月末、全屯所33カ所のうち被災した16カ所の屯所すべてが復旧した。市民の安全・安心を守るうえで不可欠な消防団員の拠点がようやく整った今年、陸前高田市消防団にとって大きな節目となった。気仙地域(特に大船渡市と陸前高田市)と関わりを持って8年目の私は、さまざまな魅力に取り憑かれたひとりと、現地で再建屯所に取材し、陸前高田市のいまを、全国の皆様に伝える。

陸前高田市の現在の様子。土地がかさ上げされ、さまざまな津波対策が施されている。



写真右から陸前高田市消防団長 河野吉昭さん、気仙分団長 細谷隆夫さん、団本部副本部長 佐藤一男さん。

### 屯所は心休まる場所

岩手県陸前高田市は、岩手県南部に位置し、北は大船渡市、南は宮城県気仙沼市に接し、三陸特有のリアス式海岸を有する。消防団は、市内に高田分団、気仙分団、広田分団、小友分団、米崎分団、矢作分団、竹駒分団、横田分団の8分団がある。

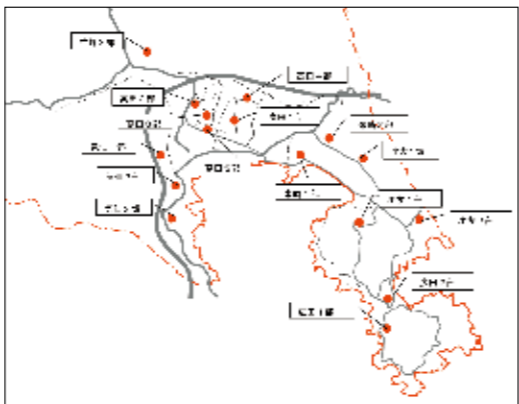
9年前の震災直後、消防団員らは皆、口を揃えて「とにかく居場所がない」と言っていた。震災後の気仙町には屯所(消防団詰所)がひとつしか残らなかったからだ。以前は20人強ぐらいの団員が集まっても畳や土間に座れたが、震災直後はそこに倍以上の団員がすし詰め状態で

寝泊まりして対応した。その当時を考えると、全壊した屯所16カ所がすべて完成したという事実は団にとって喜ばしいことだが、課題もあつた。この9年間で団員が著しく減少しており、分団を構成している分団支部の中には団員がひとケタ台のところもある。今後この消防団をいかに円滑に運営していくかが大きな課題になっている。

平成29年4月から消防団長に就任した地元気仙町出身の河野吉昭さんによると、団の復興度は、震災前を100%とすると60%ぐらいだという。「統合という選択肢もあるが、屯所が地域住民の拠り所という役割も

担っていることを考えれば、どうにかして存続させていく道を探っていくしかない。団員は100%頑張ってくれているが、目標は震災前の100%以上になること。とくに重点を置いているのが団員の確保で、就任した年の6月には林業再生に携わる「地域おこし協力隊」の隊員4人が入団してくれ、このうち今年4月に3年の任期を終えた。夫婦は帰省せずに矢作地域に永住することが決まり、消防団も続けてもらえることになった。また同年10月に市の若手職員4名が入団してくれたのも嬉しかった。市・市消防本部・市消防団の3者が入団勧誘に力を入れた成果が徐々にでき

図1 復旧屯所位置図



開放(披露)して住民との交流が行われる。団の行事というより町の行事である。後援会、協力隊、婦人会等300人以上が集結し、演習後は体育館で余興大会まで、食事は団員の奥様が屯所で調理し、反省会が深夜まで続くことも珍しくない、まさに「大イベント」なのである。令和元年からすべての気仙地域で震災前と同じような演習内容ができるようになった今、今度は人手不足という課題が浮上してきている。

### 他都市との交流

震災を機に、これまでなかった他都市との交流も生まれている。「地域格差が大きいので県をまたいだりする消防団員同士の交流はなかなか実現できなかったが、震災翌年から義援金や食料品等を届けられた千葉県安孫子市消防団とは縁が繋がりに、今も交流が続いている」と河野団長。全国や地域の方々に支えられたからこそ、屯所の復旧に浸ることもなく、次の課題解決に向けて気持ち切り替えている頼もしい河野団長の姿があつた。

### 春・秋の演習が熱い

陸前高田市は、他の地域と違って、演習を分団ごとに行う。特に春の演習は町内行進・ポンプ操法・想定訓練・式典での表彰等を行い、OB等地域に関係する方々が祝宴しながら情報交流し、屯所も一日中



陸前高田市消防団 消防団長 河野吉昭さん

## 〈気仙分団〉

### 気仙町消防団は年中無休

気仙分団分団長の細谷隆夫さんによると、気仙町はイベントが多い町で、一年中何かやつている。秋の町民運動会で前年の秋からの年間成績が表彰されるので、消防団活動の一年は毎年秋からスタートする。冬のバレー大会だけでも4種類。防犯協会はキックベース大会。8月7日は「けんか七夕※」、お盆は松原球場(現在再建中)で野球大会と続き、「3、4月が町内会唯一のオフシーズン」と微笑む。イベントが多く、盛り上がりがあるおかげで団員の結束

## 団員が汚れて戻ってきてても休憩しやすい作りに

は強く、さまざまな行事への参加、協力の声をかけやすいそう。すべてが真剣勝負なので審判もラインを踏んだだけで黄色い旗を上げるほど厳しいそう。

### 屯所をもっと使いやすいものに

気仙分団は4つの部4カ所の屯所があり、そのうち堤防よりかなり低い所にあつた所も含めて3つの屯所が津波に流された。最初に再建されたのは平成28年2月の3部屯所。ここは、先に設計された他分団

「集まれる場所があるというのは大きい。再建されるまでの最大8、9年間は、毎回違う集合場所を団員全員に伝えなければならなかった。今は場所を言わなくてもここに集まれる。住民にとっても、あそこに行けば消防団の方がいるということが安心感が繋がっている」



最後に復旧した一部屯所。旧屯所の教訓から車庫隣に車庫と同じ広さの倉庫を設けた。休憩室も以前より広くし、利便性、機能性を向上させた。

### ※「けんか七夕」

岩手県指定無形民俗文化財。900年の歴史を持つお祭り、基本的に参加型。太鼓の乱れうちと共にロープを引っ張り合い、樹齢50年の杉の丸太がくりつけられた山車をぶつけ合う。リズムは気仙の熱い血潮そのもの。東日本大震災の際に4基あつた山車のうち3基が津波で流され、平成23年は1基で巡行。平成24年に新たに1基が新調され、平成25年には震災前と同じ場所でのけんかが実現した。織り姫と彦星が天の川を渡って会える特別な日。そんな旧七夕に盛大に「けんか」が行われる。





気仙分団第2部屯所

周囲の住宅地と見間違えるほど景観に溶け込んでいる。近隣には気仙地区コミュニティセンターも完成した。

### 団員の確保とPRを

震災から来年で10年。令和という新しい時代に向けての課題が大きく2つある。1つはラッパ隊も含めた団員の確保だ。今泉地区は団員数が満になった記憶はなく、現在も半数以下。

「今は我慢の時期かな...」かつては、春の消防演習の市内行進で子供達が拍子木を持って先頭を歩いた歴史がある。それが今は行っていないが、屯所の近くには保育園がある。地域との交流を図り、地域に根ざした行事の中で消防団の車両などに触れてもらえることが大事だと思っている。

2つめは、手薄だった消防団の広報業務について。震災時、消防団には広報担当がいなかった。皆が活動に集中し、誰も被災状況や団員の



2部屯所は、団員が活動後の汚れた服装でも出入りして休憩しやすいように、土間様になっている。右上の入り口を入るとすぐ正面に土間があり、ストローを囲んで話ができるのがポイント。

活動を記録していなかった。携帯電話はあったが充電器がないので通信を優先し、撮影すらできていなかった。当時、団本部の部長がつけていた手帳1冊だけが記録として残るのみ。今後は訓練や災害活動を記録のために撮影し、後世に残すため年に1、2回でも活動報告や要望をまとめていき、将来的には本部機能の1つとすることも視野に入れていく。

「分団長の任期は2年だが、長くやらないうでできないこともある」

(細谷隆夫)



気仙分団 分団長 細谷隆夫さん  
郷土愛を熱く語る細谷さん。

## 〈米崎分団〉

「ここでやっていかなければ!」と奮い立たせた新しい屯所



米崎分団第1部屯所。

東日本大震災で、田んぼの真ん中に建っていた第2部屯所は流された。震災直後、2部の団員は流されずに残っていた第3部屯所に間借りしていた。団員のなかには、自宅が流されたために屯所に寝泊まりしながら活動を続けた団員もいた。避難所としても、待機場所としても屯所は重要な存在だった。

米崎分団第2部屯所は、平成27年5月に復旧し、JR脇ノ沢駅横にあった第1部屯所は翌年(平成28年)4月に復旧した。しかし、周辺の住宅もまた再建されていないなかでの再建で、ボツンと建つ屯所を見

た細谷栄伸分団長は正直、複雑な気持ちだったという。

細谷さんが消防団に入団したのは東日本大震災の発生直前。現在11年目の若手分団長だ。震災時は想像を絶する現場のなか、無我夢中で活動したという。

「水道も電気も止まっていたのでわからなかったが、翌12日朝、明るくなってから見た町の状態は、「もしかしたら夜に大きい津波がきていたのではないかと感じた。そして気がついたら「一気にこのポジションに来てしまった感じです」

前分団長からの引き

継ぎ等は基本的になく、すべてが後手後手になりがちだったところ、たまたま自分より1年前に入団していた地元の子どもの再会が細谷栄伸分団長の心を支えた。

「彼の存在がどれだけ大きかったか。悩みも気軽に相談できるので大変ありがたい」

米崎分団 分団長 細谷栄伸さん  
柔軟な発想力や行動力が武器の分団長。



団員数は現在55名。少しずつだが減少傾向にある。しかも細谷分団長自身は大船渡市で働いており、災害時にすぐに現場に駆けつけることができない。また米崎地区は避難行動要支援者を含めて高齢者が多く、隣の高田地区全体が高上げ

小友分団第1部屯所。駐車場も待機場所もかなり広いのが特徴。



## 〈小友分団〉

後継者を早く育てなければ...

### 消防団活動は生活の一部

「津波でモチベーションまで流れてしまった。火消魂も忘れてしまったかも...」

小友(おとも)分団の佐藤安雄分団長は消防団の団員となって28年。東日本大震災では実家を含めて故郷がすべて流され、唱歌「ふるさと」は聴くことも未だにづらいという。壮絶な震災体験を経た今もなお消防団活動を生活の一部のように続け、昨年分団長に就任した。高田町の出身だった佐藤分団長は、東京や仙台で働いた後、地元に戻ってきた。本人曰く、とくに趣味等もないので草野球のような感覚で団員との活動や交流を楽しんできた。

### 浸水地域の屯所は高台移設を要望中

小友町は4つの部に4カ所の屯所を持っていた。このうち、東端に位置する2部の屯所は震災の約2年前に落成したばかりの新築だったが津波で流され、ここが市内でも一番早く改修されることになった。再建・供用開始は震災の約2年後である平成25年。当時は移設すべき土地がなかったため、浸水地域であるものの同じ場所に建設された。

震災前の屯所の柱とシャッターだけが残っていたため、改修スピードを優先しての決定だった。現在は土地が高上げされ、高台に土地が確保できているので、改めて高台での再建依頼を出しているところだ。

友分団第2部屯所は団員の娘さんがシャッターに描いた絵が残されたためそのまま活用し、車両にも引継いでいる。



されたこともあって訓練参加や避難誘導がこれまで以上に難しくなっている。そのような中、昨年(令和1年)2月、米崎分団の活動として、お年寄りやからだの自由な方の家を訪ねて雪かきをするボランティア活動「スノーバスターズ」の県内の団体に参加した。この活動を陸前高田市消防団の本部長が地元の新聞に載せたことで顔を知られ、仕事上でも声をかけられる機会も得た。

### 「私たちは、悔しいんです。だから後世の方達には命を守るための行動について語ってほしい」

団本部 副本部長 佐藤一男さん

佐藤一男さんは、防災プロデューサーとして講演会等、様々な防災・減災活動に従事する傍らで、消防団本部の副本部長を務める。また、NPO法人「高田松原を守る会」の理事として、古くから岩手県の内外の人々に広く愛された名勝「高田松原」を復活させようと取り組んでいる。陸前高田市の象徴・誇りそのものであった沿岸部の松林は、およそ300年前の先人2人を中心に防風・砂防の目的で植林され続けたもので、震災前は7万本もあったが、震災による津波で壊滅し、奇跡的に残った1本が、「奇跡の1本松」として保存されている。佐藤副本部長は、NPOの活動として平成29年春から松苗植樹を本格的にスタートさせたが、林となるまでには50年以上かかる。この活動を後世まで継続させていくのは、容易いことではないが、「あの美しい高田松原をもう一度見たい、陸前高田のこれからを守る」という強い思いで防災活動を続けている。

さらに認定NPO法人「桜ライン311」として、陸前高田市約170kmに及ぶ津波の最大到達地点に桜を植えた。花の時期を迎えるたびに、この花の下で「ここまで津波が来たんだ」と思い出せるように。

消防団員用に支給された防火衣。

陸前高田市の沿岸部の現在の様子。



陸前高田市消防本部の再建された新庁舎。この中に消防団本部が設置されている。



震災前のまわり隊(左から3番目の気仙町は上のマークが警察「警防団」を代々大切にしていた。(佐藤分団長提供)



小友分団 分団長 佐藤安雄さん  
佐藤分団長は、穏やかな表情の裏に、芯の強さを感じました。

性で、それが良きなのだが、消防団は基本的にトップダウンで動く組織なので、馴れ合いの地元出身者同士は、互いの距離感に苦労することも多い。最近では消防団の今後のあり方を考えていて、広報活動でイメージアップを図ることも考えている。私は今年60歳となるので、後継者を早く育てることが当面の役割かな...」